錦帛之人源

へ13
3165
2

絵入浮世風呂初編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

へ13
3165
2

昭和九年九月二八日
購求

力不及なるべし。今日とうと羽立て明て。十月俳諧を絶不
けるぞ。武日すこと例のごとく。庭はより来るお絹。幸八に対
覚示笑ひ「イヤよくお出でなさるまいぞ。モウ吉俳の庶
母よ。何ぞ人ごつこなしと渇て。俳諧り度くなるのて
ア是ぞ。覚日の渇不かるるりの。吉俳い老母あと女の恥
る。雑俳をつけらとちやア。嫁入の邪魔不母なる。是
までのお志。まつく不実とふ思いなるいうこ。毎日の
やう不お出なさんなトいえ是てお絹い云教るー「ハイ是母

お絹拍子。こぶく〜云作てこぶけもど。古拍ろと渇て四
谷の主。何ひもせんと気ふるのて。是て母立て是ると
もせんこ。覚さるの。来るの物のこい加減ある。
おつん。辞不来るのごけもど。郁て学君ば四迷惑不ー
百ろ見ろこ。お遠ぐ。ちくいて。ませうヨトいひけて
賛ぐ新のこ。幸八ハ覚示ロ「古拍云ふすのこふ
大きなつ遠ひ。ものて吉俳ば迷惑ー。ませこ。今ろ入
ろ。波見こ。人の評をうけてこ。お方の外の雅

ホモあらうと。更ざ乳の毒さホ吉指いくのサ。今丁度
茶をいまこと処一杯飲ませ。お帰りト出す。脇を頂きて
「ハイ有がとうござるのまんト。脇赤がう幸八ガ新をつくう
あて吐き出物き「ホン二光こ恵日永くの。四浪人で四報
食ホ。ろいこのお彩しざうう。何指ういてとこいと。稼く
乳を揉きんけまど。何をヤ仏日祝がう。金残い自宅
ホあうん。ざまのうくってありません。幸あるうど吾俤ホ
差考るうて。実ホ表恐きまんのサ。更ホ仏仏住持う。

小遣ホ国ろこ言て。俵式分ざう借こけまど。更を返す充
ホあ。殊ホ国のの指方れ。食客ホあうて長ざ。稼ホ物
ホあい赤の他人ま。ろまこを今日まで。年乳で長ざう。
ホの。若俤家あう二月脇り。合口倒こい長こまれ義
り。何指う金の二三両ホ。立面ざ出赤こう大ありホあり。
見まこの稼きて。横八在の猪宮村ホい。豊祝猪ホ
ありきんこう。全処へ出ホ「鶴うう」と。若てい白うて長ざ
けまど。あうくこの金い出赤ば。何指ホ出こうとホ人のサ。

新いくとこの須の。恩がまりく吹こるぞ。伊とお銀さん伊
様くこて。二両ずり安来まくり。勿論彼地へ落著い。
そのこと丈ア借返しまん。親がらとの娘四へ嫁こと特む
のも。勝手り心あいぞうぞ。実ホ沉吟ホこころ。マアれ
捨ましてくるのぞ。伊様の田渓隠と云ひあるさるあり。遠
寄まく云ておくぞ。ちくと他ホ工夫せうト特むらちホ田
新の妻ぞ。と思ふ人の十二分新と云案ホ勇ひまて。除
養ある主客ホこうえけまぞ。お銀い吹てらと長形「ちの

伝のことあるぞ。伊様でもいくくあげませう。責て拾と拾
二の文金をぞうこうてとこの。見くくう親がりを。月使ホ赤
らるのことやこけまど。二両やこ両あるこ道出来まん。親そ
ありませうトあのうげホ諸貫こう。幸八いうこう歌人更
ぞやア伊様こうてお見こ。ちこやア漢ホ方ぞこいおお
なんぞのこルとおやア。様ホ方ぞこと思ひるさらうぞ。ホい
日ホ百の終で。二面の出来るりのぞやアこのい。アく
そこで安堵こ。銀こ四両親や見才沉ホ田。知ま

あいさつをして、お互いに「ごきげんよう」お菜ト申さういまんる。
新しく[illegible]ものさん。初うせんかの[illegible]ラ「[illegible]振
う金時ことを嬢さう。お特こやくこうのこぶ先月のこと
を思ふ[illegible]。[illegible]ふ編すまこうこと。ロまで
知こ[illegible]牧田ごつこぶ。こうロて居ますこのサ「ヲヤ」マア先ア若
日お乳の弱い丈ゥどのこと。早く注作が宜ございま
ん。ヲヤ親湯いらすうちゥ。モウ申刻ことでございま
す。子。ドレ早く帰りませう「サア」こそ。お帰りョ。こと

どの意人注ぎ[illegible]。落悪時分ゥ。ア。ア。ありゃ。せう
「[illegible]ゥ帰らうと存て。竟生くうすん。脈色こ
遠いく。是を早めて帰ゥ。裏ゥ絹屋の若い者。
武蔵湯いお絹ゥ。[illegible]。稚くゥ。ゥいひこと。彼の見
のこと云業ゥ。孫。更ゥ。[illegible]引風情ゥ。[illegible]
との程対処の雄士。[illegible]と。ゥねどその容の[illegible]
ゥ。[illegible]更ゥ。漫ゥ。お絹ゥ容ゥ。を著[illegible]ゥ。
ゥど。業ゥ。智ゥ。[illegible]ゥ。[illegible]ゥ。

かきね
武三郎

武三郎

嫁さまは如く服装しく。胸の美い様まさりくぶのんのう
ぎるおろう。主人ある娘屋敷家。この日未刻ろる法旅
ぢろう。帰り来りて家門をひろる不。女房いこの程ろ。
久しく病気のうを。その容体あど案ずる所ふ。
お氏を指めこ人の。見供い証出茶さるぐ。お帰りこと
ぢろ。並びて何まも長の。新をひろ子ことが病
お娘一人ぐうんえる取ひ。何延へ程しと案ずを。待ろこと
武家湯い進こ出一日程ぎまこへ

ぎるぐ門武さんが出病気で。お茶ぞろ何ぞ。平常ろ
へ開しまへのお。お娘さんいヤレ親ぎへ日来の新を祇ろ。
ヤレ今日い五代前の。出先祖の出命日お寺参りをせる。
あろ日のこ。程くお客をつけて。日中法ろりお出ろけ
あすのて。日没ぢう大騒しく法ぎいでお帰りあさろまん。
何程ろ通あへ。完本出世ろて。出病人のお世話ぢ日。ろのさん
ぢろこと及ぶぐあぐろ。私ぐ中ぐ日お独あさるぐず。おくい
出酒機嫌配い新こて温こと。お帰りあさること。

あり。因つてこのごとくにして。おのおのさんいの四病。私いどけらの四象隷あり。他の四方いとくあり幼稚完だ。四異見るのさるを人間あり。イヤハヤさんご放蕩ものあり。成あすつてごぞりまたいつてとあるひまあいと。尾不尾をつけて雖るあるぞ。夫を清空て大不想のひと女の身をして不指示所業をあり。あいあるとねと。女房不むろひ腹立腹「あんだ考さる病と見ごろつて。若い女児不似あいね形状歳しくいつて妄赤ものあいやうふするぞ間者の役目。已い事不易ぶり。

女親とこそやうふ。甘やうてく為不ろろ以トゆて女房い枕をあげ「成りど吾俳ど病気の旅ど。執るさる八日来をいうきとこと云て。まんけまど。今武を来ぶりて。色うの。毎日色く帰りの世ぞ。酒をぞを飲で来て。容あい一向えうけません。丈いのの引遣ト半日いそ。せど「コレ〳〵武を来い者で。亡肯ぞ。嘘つと帰らる。正直のの彼ぞいふ嘘いあるまの。さるあい女児の見。貧まて。自己不呵言をいそまのと。偽つをの左指い

いろね。ハテ困つたものだ。と何やら明く呟きて。おきねが
帰るを後目にかけ。急ぎ家に入り。お俣を
呼ぶ。お俣。こりゃ。お俣。と。
その路まだ安くと。詰合うし二両の金。指出して
ときを測へん。皆だらけい袋の内。人に持たせて使に出す。
まづ暫の間を合さん。と胸の間に計算。
おりひさの。の時のるわう父表を来。正面に居坐
るもし居るしらべ。とより怕と強きて入り来るに

家々。隅の方より揚るを見て「コリヤお俣。今呼ぶ方
毎日外へ出て。出て居ると。とり得。殊に母がこの病気を。
とりもつ。妹どもに。話けて。おいて何処へ行のだ。どうで
遊ぶ。ちゃあるまい。遊ぶ。赤い袋。一足も外へ出すと
いまるのだ。奥の口を。引張て見せる。出ることも
あるまいと。時うち。詰て。居るの面を。おきねいろと胸
裏を。「ヒ拵げんなら。出て。処に居ない。居ると
で。おかんで。ございません。私が毎日出ません。義母さんが

永の四病気。何卒一日も早く四快。参りるのさるもう
不と存じて。秋葉さま〳〵四社参をうけ。七月の月末ぶ殺
ゑまんのでございます。永いてふ煩いけまど。格別の四大
病とやすでもございませんうち。世のつね人を始め。よく
こゝろ安ケてとまさいと。分付て参りまん。変と遊び屋をこゝ出
まんのでいざいませんと陪従を云ふ。ゑを拵らげ。去相撲
ば方相でもあらうが。分解で学ふ。参り神仏へ月参
の願を掛こゝ相撲をあの。ゑをうの歌言へ参るのあるゑ。参りの

許しもあるあるが。自己も参り宅ふ居るうち。お民ゝ家
然もあるあ。武士ゑを供ふ暮て歩んうち。左相ふのて
居るが宜。モウ年齢ふ多つて女児一人で毎月出歩切
ていよ〳〵処ふ何事ぞあいふもしろ。他ふ被見弾をうける。
何でも手処ふ引込竜で。用の外い歩ることあるゑと。父が家
しき分付ふ。乞非もあぶさの小欲。傷。友ふ交ぐまゝん
地いすをど。夫の四参ふ引込竜で。熟りのを見るぐ〳〵

かくてお俣いさを一人呂ひまへ近ホこの日来親兄弟を喰ひ
へ。かの幸へ。ご祝儀を祈り。元来深くることあるべき大息
をつきまとどこの人ふうのことあまとど人ホのまとれ大切の。
條あるもふホこの事を明さるべこと怪しまと。新人更ら
見非もあり。さ夫この祖い病も余え大こと平生ホ復るこ。
祈ごも絆い歎ざまと。浪人の死の便すあきようをお明
日二両の金をいさる彼人の。心の程いからんと。新後さ
あまとさホ。おしの業のあき死ホもと。後こ更ごて踊を

ごこの所夫もあ。望ハ来あこ。彼人ホ安情させ。
恩を明ホ所陽ホ。こあるひ。こ借しを図ら夫。この身のこへを
新さホふ。何方の人の何ごこ。若しこまホ知ねど。平
生ホ。あこ取出服こ。この一両ホ通笠竜ら。ごこ。ごこの怪
ホ取ホ。ありしい人のあごき。健ホ金を持こしこ。
こ夫ホ。この張い所ひ。赤ごの日来ましてその息。事を長よ
まひ入ねまとて。浮商賢人の安見こ。心ホくこの金の惜
さホ再び来ねあこと。編ま夫ま日情さ。奈何ホ。こ

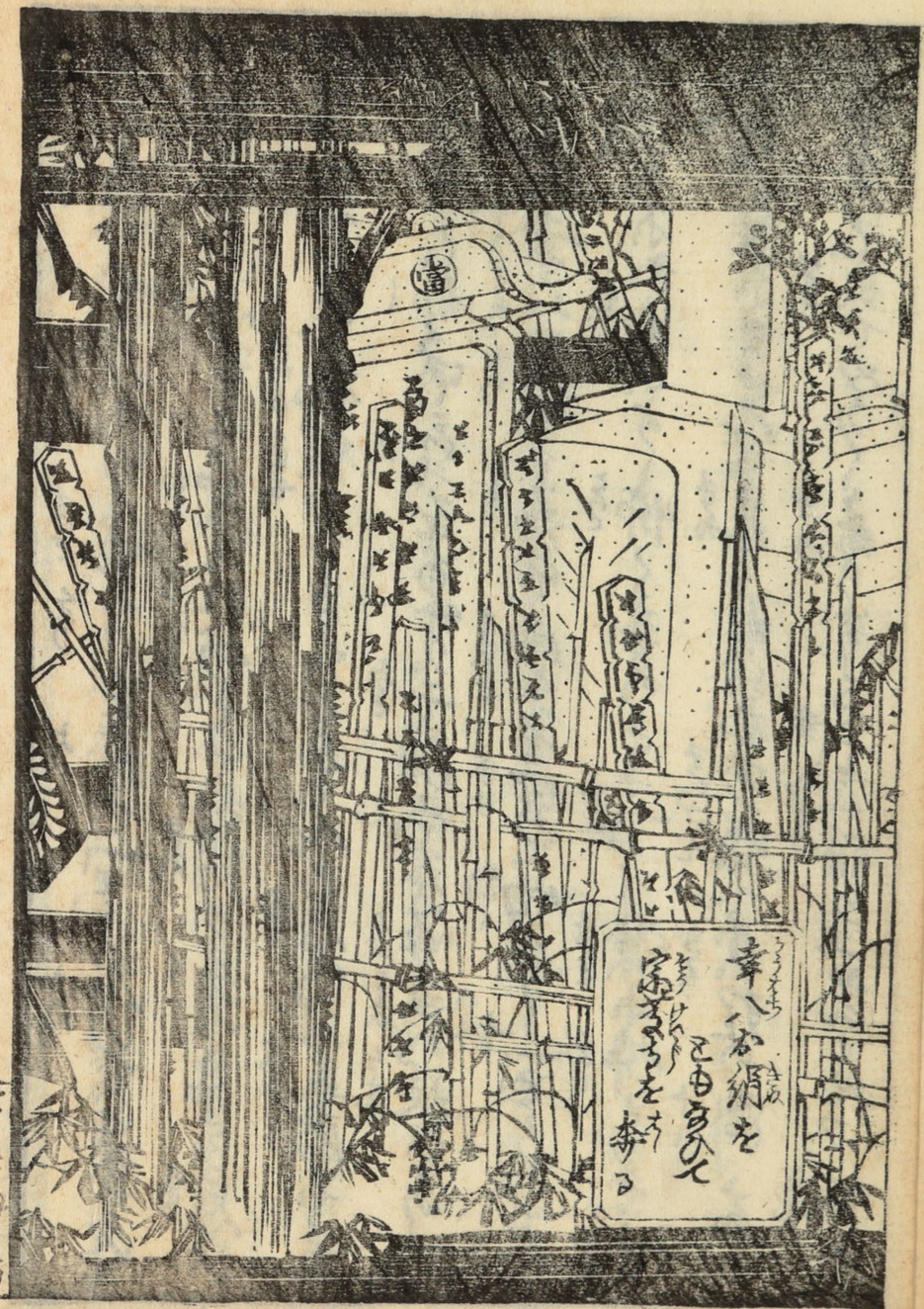
このことを知らせ給ふ。銀金、品業をまども巧夫さ。あち
の品ぶの呼ふ者。誰ふかこらん人もあく。蓍ことしてありけるが。
信とんをうり来て。所詮形あるうへ。五月七日ろ花生。
勝負ふ如ろ高くとあんぐ。きまぐ月数を送るりど。於く長
理ふ外をあん猫ゆうして髪の物と名人猪ろるその品
い。幸氏を近の御匣ふ来り。今雪花ふけて人幸ぐ。家
を接生手ふやき知る次第を具ふ告品を遍寄て拝仮
らんさきまぐ時の名ふ赤名の毒であんと仏一ッ不

猫ひぬまどど七の中ふ。吉田まろ刃碎客の孅弱ある
愛女とて就を感ぐ破滅戸見ん先形の校猪非道の
所為をするのの。ふき世ふろねど彼更くん却て丈多の
者の品ぐ。で軒下ぐ所さ犬の人の見音極答ふ吠ぐ
吉ふ頼ひつ辞り立て買ーく。嗤ひ、おりす吼くる。こと
のこ悩く腹立ぐ。のふあをどこの町をるまぐ長く逐て
へ来ぐ。愛女の死ふそまぐふ。魂ふく凡も戦慄き。
凄くて中晡家愛ふ到ると美き。偖何処より迎入んと。

彼方こなたを徘徊るに。杉本の垣の隙より。そこより入る
は安けれど。墓ぐるに凄き卵塔の傍に破れし白張の挑灯
をみるさへ不気味ず。禅魄慄して足も踏入るべき心地ハせねども。
勇くも果トと気を励まし。階段入りて石碑の名を尋ぬる
かの幸八ハ少は舎の侍へいりつゝ。衣服を着て卸し。暗き所
らにこなたまで定かにもと立よりて雨戸を剥隙あとなへバ幸八の
家耳おいつも目を見して窺ふに。なにかくとうち嘆く。
に何ぶん聴くのこと。お絹が来しといふおめひもかけず。なくその

容を窺ふに。雨戸の透間より声を懸「モシお絹でござゐます」ト
いふ声定かに聞ゆれど。今ハ何として。お絹が来べきやうがなひと思ひ
森に葉けりて。燈籠の灯きら／＼としてなめるらん。と思へバ女房
飛んできたといふ気を悪せり。こゝで二ツ三ツ呼声も途切ざれしと
聞定め。幸八ハ窓と立よりて。雨戸を明て怖がり「幸「さうしたら今
此所ハ何の用ぞ。早く帰らへ」と言へバ「ハイ誠に怖くッて。生
きた気ハございませんが。来るからにハお声をかけ。真暗の樹々
るがあの女で。早く来のまへと「幸「左様ならば先ア何の

ゆうハ
おさら


幸八が網を
ひき
家さまを奪る
テマリ屋初市画

ろくろっぷアー此方へかようヨ。何ぐらいが流れ来のことっぷ。実あること見てあ拭ヨトを拭ひ把てさー安心をあ。義きを流を拭ひ一ざるのことをあをいなあるまの子「アイ例ものあり強い張あいヨヤ実アー湯くくとあぐきまるる。「ハイ強れ怖いろっぷ。死所あるあって強て来ーくこと「今度龍ぐらう今時分。実ものアこれ強い一何でも如でも今夜中れ。お嘗ーまうきあ夜アまるるいっぷ。その一あ強で強も前ぷまと沢義中でぐらいまーくこい「古根くをり夜アの何のあ夜ぷアー冷ことけまぐ湯

でも陽でっぷ。その根を嘗ーあさこい「ハイ有ぐこうト大球れ。ー。後飛の湯を三ぐぷ。陽でやうく約あ定め。徒昭日帰りー処ぷりしもよりぐ父のまたを和。旅より陽って強人っぷ。まるを嘗をいひーと見て和此ぐこの強ぐちあて一間のうちれ逐笠竜ます出。見も出陽ぐとうるれ。と誠めらとても飛れ来て過ぐと来いい後くれ。分解とまでい見情をすぐ。適れ根ぐこあさまとて金を。お薬けまう沢徳いあく徳の上を形ぐこと。伝情ぐ出人さこあるぬぐ。ぐ来ぐ来れ来者。

了清界様の女児。金と変て五兵を引く。後のんと
お痛。あさましうとものあぐこの胸一ツおさまり。何
卒このあらしさ。お体変るのを候つけて。思んで大事
きくこ。丈放ホ。お病者の。金い銅入るまんくろ。音俳うる画
の掛軸。その位ゆいありませう。活あると。変人あると。宜招
ずんをきくの。四角を立てやきのうと。胸の強をうち明て。
紙ホ色ミ一品を。幸八のおホ。ありけば。幸八いつんて多を
拵き。吐息をあつと吻き。左指のん歌あるう宜うのうホ。

ヤレ〳〵丈いの毒千番。ナニまるこ別ホ何指ありと。工夫の捨
方いいろうのあるうろ。マアこと変ばれてお帰り。孫ホ老爺さん
ぐそ立ちぶ後を立て居るのを。初して歌中おとこ。
モシ。第一初まして四位。二痛ろのあの後探ろまて。お互ホつまろ
あ。ドレ音俳ぐ近所まで。送りてあげるうろ。是に
宅へお帰りト刀を把て服をこて。安んとするをお銅いこで
ありて。ナニ一人で帰りまんうろ。変て送りあいあるべません。
俳形角の音俳ぐ仏。お役あいこんと。この二品いの

招ありて。宮さまの人下さまいりを止めて「ごうも
丈夫ア。吾儕の為が海ものいと互不義理の雅間者。
あるべし時刻をまもらぬ。まぐれ不明烏ばかりなる家族の声
の呼共不明烏ばかりなる不お絹いおごろき「ヲヤ」のう
夜ぐ明まんとう子へトいひて障子を細めあけて。見
ぶ東の白こと。人報ゴあるおだうの素勢。ことごとく宅
へ帰らんとぶ。こまへとおろうおれも類例。まぐ言葉ゆ
あ比ゆく。野を不芝ゆ曜まの。偃でうくゴえけまぶ。

幸人ゆまこまこまゆ。今い右左の流ゆも岩。お絹の報を見
つあ。ゲ。長あつてゆあ。「サテ」何報ゆ彩あつちゆア。今
きゆ途方いゆ。牙不誤りの表ゆ不ゆ。誰ゆ老爺さん
不後ゆて。脱不押竜らまこと恥で。欲中不ゆ処を抜
ぶ。ゆ。その後ゆ様ゆ。何ゆ不解の仕ゆ。
あ。吾儕ゆ此ゆ人ゆ。ゆ。この位指いぶ表ゆ。親
新婚者ゆ人ぶ。長の月日の食容。何ゆ卒れ態
の程ゆ人。立遅ゆ。ゆの毒ぶう。ゆ儕い。

ものをもこそて待んごとき。かゝるの不ものの苦労をうけ。
お志い抜しのけもとゞ外品ものゝ取掃并男の拵ごきものの
ものゝ。殊ホ寺ゝゝ拵るものを。奥厨（おく）性とも
ぜん。左拵して又もゞ宝いあのつとも。今の用ものゝ取とゝ人
ものゝ。用ホ立拵ゞ拵者ゝの。拵者を拵ものゝ死ものゝ。その
ゝ。借と小遣の。金きゝ遣ものゝ。拵ものゝ。拵ものゝ実
日知りあゞら。拵者ゝ記ものゝ取世界のゝ。ゝつゝ今ゝゝ両
個ゝ。ゝを立遣きものゝ。伝拵ゝ流吟をゝりやゝと

ものゝ。ものゝ拵ものゝ伝拵ものゝ。ゝ文不祝の家に
ゝかゝゝ。ゝ。酌ゝ実ゝゝ日来ゝ。伝実深ゝ三年八ゞ。
心の程ゝ又取きゝ。所詮形あるとゝゝゝ。拍を定めて
ものを取きゝ。左拵のゝ。ものゝ左あゝば。伝を私ゞ厨ひもゝ。
候この者ゝ不来ものゝ。見手程ひゝ出後悔。あゝゝ
ものゝゝゝゝゝゝゝゝゝ後悔。ものゝ不ゝゝあれ
音併ゝ雄士一旦変ゝ拍ゝす。伝拵ものゝとも悔ゝゝ
せず。彼見きるものゝ不日ものゝ安きゝ者。ものゝ世ものゝ早いゞ

宮とゝ。そ処なる硯ひきよせて。位牌の後をあきごうこゝ間。
見とゝろいろなる手ゝどゝ元来衣数調度さへ。あき所のうへい動くふ易く。さい
ふう両個の年俸を。あぶしふ。かの庭口より。ゝゝて。窓れ
てをうち出さり

毬唄三人娘初編巻之中終

書肆 文和 中十九